

宮地嘉六著作集

第三卷



宮地嘉六著作集

第三卷

宮地嘉六著作集 第三卷

一九八四年四月十五日発行

定 価 三千円

著 者 宮地嘉六 ©宮地彌生子

編集者 宮地嘉六著作集編集委員会

発行者 宮嶋 秀

印刷所 株式会社 開明堂

製本所 株式会社 松本製本所

発行所 慶友社

東京都千代田区駿河台三の七 荻野ビル
電話(一九三)八九八三

凡 例

一、本著作集の収録文は、原則として著者の単行本を底本とし、初出及びその後の刊本と校合した。著者書き入れ本のある場合はそれを参照した。単行本未収録の著作は初出によったが、収録されている著作でも特に初出によった場合がある。それらの異同などは「後記」に注記した。

二、収録文は、底本に忠実であることを原則とし、仮名遣い・送り仮名・著者固有の表現などはそのままとした。ただし、漢字は新字体に改め、明らかな誤字・脱字・句読点の欠落などは適宜加除訂正をした。

三、振り仮名は、総ルビの文も含めて難読・特殊な読みなどの最少限にとどめた。

目次

群	像
後	記
.....	
黑古	
一夫	
.....	
325	3

宮地嘉六著作集 第三卷

監修 小田切秀雄

編集 堀切利高

森本修

黒古一夫

宮地彌生子

大和田茂

印刻 宮地嘉六

群 像

一

七年ぶりにフランスから帰朝した市川仙一郎氏の爲めに神田万世橋のミカドでその歓迎会が催された。十一月末の或る夜のことである。京之助も案内状を受けて出席した。彼は洋行前の市川氏とは一面識もなかつたが、氏がデモクラチックな思想家であることは古くから知つてゐたし、そして其著書に対しても敬意を払つてゐた。それに帰朝後唯一度K先生の家で偶然逢つて言葉を交してから其の人の柄に何となく親しみと同情を持つたのだ。綾織のコールテンの服を着た小男で、瘦つばちな、色の浅黒い、小粒な凹んだ目をしばたゝきながらやさしい声でものを云ふ其の人はどう見ても善良な、そしてどことなくさびしみのある、正しい人間と云ふ印象を与へずにはゐないのであつた。

「苦勞人だ……」と京之助は其の時直ぐ思つた。そして、かねぐ聞いて知つてゐたいろ／＼のこと、それは此の人がフランスへ行くまで、長い間関係があつたといふ母親のやうに年上の婦人のこと、日本での婦人運動の先驅者と云はるゝ其の婦人との断ちがたい関係とその強い執念からのがれるためにかた／＼外国行きを思ひ立つたやうにさへ云はれてゐたそれらのおかしいロマンスを京之助は竊にその時思ひ出した。

「それほど好男子ではないが、矢張女などには愛せられる方の人には違ひない。」と彼は思った。そして初対面の市川氏に向つてさうした無礼な感想を持つ自分を直にたしなめたのであつた……。

さてミカドに於ける其の夜の市川氏の歓迎会はなかくの盛会であつた。新聞記者、文士、大学教授、画家、ソシアリスト、無慮五十人余の来会者であつた。その中には婦人もあつた。然し市川氏と以前たゞならぬ関係のあつたその日本に於ける婦人運動の先驅者なる女史の姿は其の夜は見えなかつた。

「随分しばらくでしたね。達者で歸られて何より……」

「ありがたう。」

「少しも君は老けてゐませんねえ。却つて若々しくなつて歸つて来ましたねははは。」

「いや、さうでもないです。」

「やゝ」

「おゝ……君でしたか……。」と市川氏は一人の別の紳士に抱きついた。会場ではそんな調子で右から左から知人達は市川氏を取りまいて我先にやたらに握手をしかけた。

「市川さん。あなたは誰にでもキツスをして下さるさうですが、僕にも一つキツスして下さい。」と一人の青年画家は云つた。

「よろしい……。」と市川氏はいきなりその画家の首つたまに腕を巻きつけて頬つぺたにしやぶりついた。笑声が室内にどよめいた。さうした表現の動作はおかしいほど誇張的で無邪気でコメディカルであつた。

「あれがフランス流なんだな。」

と一方では誰れか冷かし半分に云つてゐた。

かうした会で京之助はいつもつましやかに自分を守るといふ風であつた。それは彼の臆病な一面であつたが、さういふつましやかな態度が自分の自尊心の爲めにも安全であり、そしてそれが自分としてふさはしく立派でさへあると云ふ自足を感じてゐた。彼はかうした会に出席するやうになつたのは昨年あたりからであつた。彼は自分の存在が一二年の間にかうした名士ぞろひの会にも出席し得るまでになつたと云ふことで満足を感じた。然しさう云ふ小さい、卑屈な自分の気持に対しては自分ながら又反感を催さずにはゐられない積極的な一面が彼にはないではなかつた。

「ほんとに一度フランスあたりへ行つて来たいものだ。そして日本人的な殻を破つて自由なこだけはない人間になりたいものだ……。」と彼は思つた。

二

彼は如何なる場所でも、人に対してもう少し自分が自由で無邪気で快潤な男でありたかつた。どうかした拍子でさうなることもあつたが、後で直ぐに何事も彼は自分を反省する癖がついてゐる爲めに、少しでも度はづれなことをした後は幾日もそれが氣になるのであつた。これまでいろ／＼の会に出席して、ほろよひ機嫌で相手の説に弁駁したり、気焰らしいことを云つたりしたことも度々あつたが翌日になつて前夜のことを顧みると、何か非常な醜態をでも演じた後のやうに彼は羞耻と不安と憂鬱とに襲はれるのであつた。然しさうした臆病は或る意味では彼自身を善導し得る唯一つのものでもあつ

た、云はば彼は臆病で心弱い男であつた。彼は其の臆病な本質を守ることが自分の内生活でさへあつたのだ。

「あなたは水上君でせう。」

京之助はふと声をかけられた。それは無我の愛の唱導者として知られ、依然として変らざる加藤氏であつた。

「あ、すっかりお見せしました。」と京之助はなつかしさうにお辞儀をして「先日雑誌をお贈り下さいましてありがたう存じました。」

「いえ、私こそお手紙ありがたう。大分あなたのお作は評判よいやうですねえ。家内とも喜こんでをりますよ。随分久しくお目にかゝりませんでしたなあ。」

「は、さうです。あれから五六年になります。巢鴨にをりました時分はいろ／＼お世話になりました。」京之助は慇懃な調子で云つた。

加藤氏はそれには答へず、

「あの時分あなたの義太夫を聴いたことがありましたなあははは。」と加藤氏はやはらかな笑をした。「は、さうでした。」と京之助も笑ひながら其の時分のことを云はれるときまりが悪さうに自嘲的な色をしたが、然し自分の義太夫には少なからぬ自信を今でさへ持つてゐた彼は心からそれを耻ぢてゐるのではなかつた。三勝のさわりのひとくさがりがひどく得意だつたので。

「あの頃の巢鴨とはすっかり見違へるほど開けて家が沢山出来ました。あの家などは酒屋になつてをりますよ。」京之助は云つた。

「さうです。すっかりあの頃とは違つてゐます。」

京之助は其の時分行き場がなくて此の加藤さんと隣合ひに自炊生活をしてゐた友人のところへ転げ込んで二三ヶ月、夏の暑い盛りをそこでごろ／＼して暮したことを思ひ出さずにはゐられなかつた。其の頃の巢鴨はまだ大部分田圃で、あたりには茄子畑や甘藷畑があつたので、夜になると畦の唐黍や茄子を目がけて襲撃したものだ。

「ほんとにあの時分は山賊のやうな生活だつた……。」と彼は思つた。

「いつか真昼中にあなたのお宅へ泥棒が入つたのを我々が皆でふんづかまへたことがありました。」と京之助はそんなことを思ひ出すまゝに話した。

「さう／＼そんなことがありましたねははは——浅井君も東京へまた来てゐるさうですね。」と加藤さんは云つた。

「は、先日江田君のところで偶然落ち合ひました。」

浅井といふのは其の時分京之助が共同生活をしてゐた友人の一人であつた。

「皆さん、会費をどうかあちらへ。」と発起者の一人が云つた。で京之助は入口の方へ行つた。そこにはKさんのお嬢さんがテーブルを構へて、くす／＼笑ひながら来会者達から会費を受け取つて人名を書いてゐた。その傍にはKさん夫婦がゐた。京之助はおじぎをした。

「発起人が遅参しては困りますなあ。」誰れかが云つた。

「いや、すっかり遅くなつて申しわけがない。」とKさんは笑ひながら軽く挨拶を受けて今夜の重なる発起者らしく立ち廻つてゐた。

三

「万里子、お前そんなことでは駄目よ……それ、磯田さんをおつけしたかえ……。もつと字を小さくお書なさいよ。まあほんとうに此の子は慌てものでまります。ほほ……。」Kさんの奥さんはそんなことを云ひながら万里子嬢の会計を後見してゐた。京之助はテーブルの前が人で塞がつてゐるので、さし控へて万里子嬢の後方にしばらく立つて、お召らしい荒いはでな棒縞の羽織の背をそれとなくうつとりと眺めてゐた。高結びにした羽織の下の帯を処女らしい背中に突起させて万里子嬢は俯向いて会計に氣を奪はれてゐた。

「これをどうぞ……水上です。」

と京之助は万里子嬢の手が稍ひまになつたと見て、横合から会費をさし出した。此の時彼女はふと京之助を見て、

「あらま……」はにかむやうに直ぐ俯向いて、そして京之助の名を書くのであつた。彼にはそれが何となく心嬉しかつた。彼はいつぞやKさんと奥さんと歌舞伎座で落ち合つて井伊大老劇と一緒に見てから万里子嬢に久しく逢はなかつたのだ。其の後Kさんの家に度々行きはしたが、いつも彼女の姿は見えなかつた。自分の世話になつた先輩の大事な一人のまな娘と云ふ意味で決してみだりな考へや野心らしいものを京之助は持つてならなかつた。然し彼女の無邪気な快濶な少しキヤンでさへある娘々したすべての点に何とも云へぬ魅力を京之助は感じてゐた。

「ラブではない。ライクだ……。」

と彼はいつも彼女に対する気持を自ら自分に弁護した。自分の畏敬する、そして恩人のまな娘である彼女に対しては恋らしい気持を感じながらも、彼の臆病と強い自意識がそれ以上の熱烈さと積極性を許さなかつたのである。そして時々いろいろのことを彼女に対して夢想することさへKさんと云ふ彼女の父を彼女の背景として自分を顧みると恥しいのであつた。そこには何等恋愛の可能性をも彼は信じ得ないのみか、寧ろ彼は彼女の為にそれを願はなかつた。彼は自分の恩人の娘に対しては、よりすぐれた婿人、より幸福な結婚の前には何時でも自分の恋は容易に撤回し得ることを承知してゐた。そして彼はさうした自分の理性を自から称揚した。彼は彼女を愛護する一兵卒であることを甘んじた。そして彼はそれをKさんに対する徳義と考へて自負してゐる浅薄さがあつた。

来会者一同はやがて広い食堂へ移つた。明るい電燈の光は隈なく降りそゞいで白布を掛けられた卓上の皿やワイングラスやその他いろいろの滑らかな器物の表面に、コの字形に定まつた列席者の額に、鼻に背中に、曲木の椅子に、主賓席の大鏡に、花瓶に、窓框に反射をほしきまつた。幾人のボーイは其の間を斡旋した。

主賓の市川氏は、今宵の司会者格である、それは社会学者としてまた某私立大学の運動部長として有名な稲田氏とKさんの奥さんとの間に其の小柄な姿態を主賓らしくつゝましかに保つてゐた。

万里子嬢は夫人の傍に列んでチュリツプのやうにすまし込んでゐた。其の次にはM弁護士夫妻が列んでゐた。

京之助は一方の若い連中の間に列んで席をとつた。彼の直ぐ前には画家の森口がゐた。彼は初め其の森口と列んで席をとりたかつた。

「君は向ふに行きたまへ。」と森口は云つた。

「あゝさうか……。」

「此の男は少し俺を軽蔑してゐるのかも知れぬ。」と云つたやうな感情が京之助の胸にほんの僅かばかり動いた。

四

「なあに、僕は君の妻君の妹をどうあつてもほしいと云ふんぢやない。君と云ふ男が真面目さうであり割合にしつかりした信念の人らしいから親しんで見る氣になつたまでのことだ。そして君の妻君の妹と云ふのが年頃でをとなしさうだから、いつぞやちよつと中西を介して君の意を問ふて見る氣になつたのだ……唯それだけなのだ。」と京之助は心に思ひながらも、相手に対しては平氣を装ふていろいろの話をした。

「然し此の男の強気で存外甘くないところをも自分は認めてゐる。俺くらゐの男からその義妹を所望されたとして、それを喜んでゐないところが兄らしい偉いところでもある。然し此方は一応真面目に所望したのだが、此の男には或は充分に了解出来てゐないのかも知れぬ。何にしてもまあ好いや。」と京之助は思つたりした。

一同は慌だしく運ばれるフランス料理にナイフとフォークを働らかせるに余念がなかつた。

「私はいかゞ云ふものです。どうぞよろしく。」

隣席の若い洋服の男は京之助に名刺を差し出した。名刺には△△新聞記者とあつた。京之助も直ぐ

自分の名刺を出して交換した。

「市川さんが帰朝されたことは日本の民主主義運動にとつてはよいことでせうなあ。どうでせう。」とその新聞記者は云つた。

「さあ、それは幾分さうも思はれますが、別に大したこともありませんまい。洋行前の市川氏を私は知りませんが、フランスへ行つて大へんおとなしくなつて来られたと皆は云つてゐるやうですから。」京之助は小声で答へた。

「どうもさうのやうに見受けられますね。一体歐洲へ行つた人は皆おとなしくなつて歸つて来るやうですね、思想上の傾向まで多少……。」

「さうですな。」

「それはどう云ふ関係でせうか。外國へ行つた人の話では、あつちへ行くとどんな人でも多少民族的にならずに居られないと云ひますが、或はさう云ふ関係から母國へ歸つて来ても温健になるらしいやうですね。どうも民族的意識を根本からとり去ることは不可能だと思はれます。その点からソシアリストの云ふコスモポリタニズムも思想に止まるものではないでせうか。独逸のソシアリストがその大戦前にインタナシヨナリズムを裏切つて自國の爲めにミリタリズムを是認したのは矢張民族意識です。」と新聞記者は極めてありふれた意見を京之助に云ひ続けた。

「さうです。それはさうですとも。対象が一致する時民族意識はどうしても原始的に歸ります。私共も民族主義的国家主義を根本から否定することは出来ません。唯、ともすれば国家主義が專制的に陥つて個人の存在を尊重しない傾きを生ずる事です。最近の鮮人間にも自國の獨立運動派を度外視して

る一味があるのもそれでせう——つまり個人的自覚と資本主義的国家主義との矛盾が時代によつて民族意識の分裂を来す事になるのです。それは……」彼もちよつとそんなことを意見らしく云つたが直ぐ止めた。

「なるほどさうです……。」と新聞記者はうなづいて見せた。京之助はこんな月並な問題を新聞記者が自分に持ち出したのが少々おかしいやうな氣もした。

五

京之助は極めてありふれた問題に対して、自分はありふれた意見を云つたに過ぎないと思ひながらも相手の新聞記者が自分の云ふことを一々真面目にうなづいてくれたので、かゝる場合の自分の存在を少からず助けられたやうな氣がした。

森口や其の他隣席の二三の人々の視線が彼に向けられた。

「あいつらは、俺にこれだけの意見さへもないと思つてゐたのであらう。」と彼は心に思つた。然しさう意識的になると自分で自分の話しぶりが不純になることに氣づいた。それを見すかされることを彼は恐れた。

彼は僅のことにも得意になり易い男であつたにもかゝらず又已れを知つてゐた。

デザートコースに入つた。稲田氏の挨拶があつた。終りにかう云つた。

「なほ今晚は市川君から仏蘭西滞在中のいろ／＼の土産話もあることゝ存じます。然し私からお断りしてくれとのこと、市川君は七年間仏蘭西へをられたために日本語が自由に云へなくなつたさうで